

1945年の学校日誌 教材へ



大善寺小の市川昌庸校長
によると、昨年11月頃、校

久留米・大善寺小で発見

戦後70年

◆ 学校日誌などを掲載した記録集を手にする市川校長

久留米市立大善寺小で1945年の学校日誌が見つかり、子どもたちの教材として製本、発行されることになった。8月15日の翌日、校長が全校児童を集めて終戦を伝えるなど、戦中戦後の学校の出来事が記録されている。12月中旬に完成予定で、学校で使うほか、住民にも有償で提供する。

78年に記した戦争体験記も

来月中旬完成予定「平和願う気持ち込めた」

大善寺小の市川昌庸校長によると、昨年11月頃、校長室の書棚を整理していたところ、45年1月から12月までの学校の様子を記録した「昭和二十年学校日誌」と、78年に教員が作ったとみられる「戦争体験記1978」の2冊が見つかった。

学校日誌には、特攻隊の結成や勤労動員、英靈帰還など、戦時を思わせる記述が連日あり、校舎の一部を兵舎に使っていた記録もあった。久留米市中心部が空襲に遭った8月11日の欄には、学校上空を米軍機が通過し、相当の被害が生じたことが書き残されていた。

市川校長は「空襲警報の発令回数が増えるなど、緊迫していく状況が分かることになる」と、校区内の住民でつくる地域学校協議会に相談。製本化することになり、7月から協議会のメンバーを中心に編集作業が始まった。

現在の6年生が修学旅行で訪れた長崎で聞いた被爆体験の感想なども盛り込まれた。

久留米市の六

現在の6年生が修学旅行で訪れた長崎で聞いた被

イセンター（

久留米市のは

で開かれる企

しのくらし展

・1216

ちが理解しやすい約70日分を抜粋、写真に撮って、そのまま掲載し、時代背景などの解説を加えた。久留米空襲など関連する写真も収録した。

「戦争体験記1978」

は戦後33年目の78年当時、校区内の戦争体験者が戦地や復員時の出来事を振り返った内容で、40人分が掲載されていた。

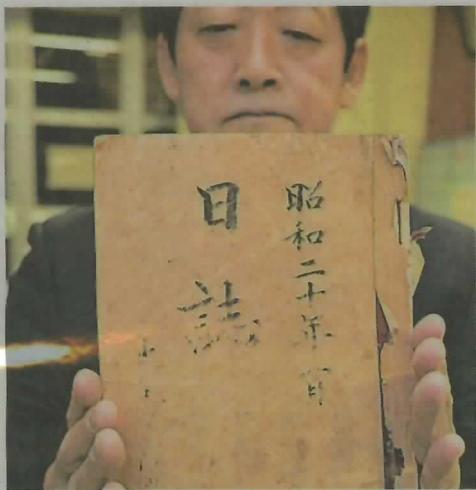
学校や地域でのその存在を知る人がほとん

んだ。市川校長の記録や職員のまま掲載し、時代背景などを超えて平和を伝えようと話し

を掲載する

後70年の子ど

の記録や職

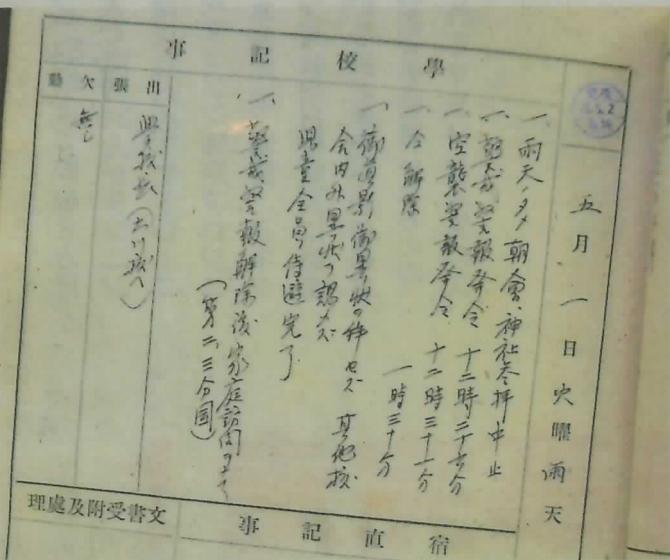


久留米市・大善寺小

久留米市大善寺町の大善寺小（市川昌庸校長）で、太平洋戦争終戦の年である1945（昭和20）年の学校日誌が見つかった。校内で特攻隊結成式が行われた事実や、空襲警報におびえたがらの家庭訪問、終戦の日の翌日に行われた全校集会など、戦争の中にあつた学びやの様子が伝わる。

戦時の学校伝える日誌

大善寺小の校長室で見つかった
1945年の「学校日誌」



5月1日には「警戒警報解除後、家庭訪問ヲナス」などの緊迫した記述がある

敵機見学や厳戒の家庭訪問も

学校日誌は三潴郡大善寺国民学校時代のもの。市川校長が校長室の書棚を整理していた時、奥の方にひつたりとしまわっているのを発見した。サイズはB5判

3月12日の記録には「全

警戒警報や空襲警報が鳴

いたことを示している。

張。その場で戦争が見えたようだ。

校児童学年末遠足」の記述がある。市川校長によると、児童は墜落した米軍機B29を見に行つたらしい。行き先は西部第50部隊。現在の南小と牟田山中がある久留米市南2丁目の区画にあり、戦意高揚のため墜落した敵機の見学会が開かれていたことを示している。

長は急きよ「福岡市ヨリ町役場経由ノ為、福岡中学ト」スグ連絡ストラト」と記載。その後、午後に開いた全班会議で、その場で戦争が見えたようだ。

中、家庭訪問が行われたことを示す記録も。新学期が始まって一段落ついた5月ごろに教員が各児童の家庭を訪れるのは今も同じだが、当時の5月1日の日誌には「児童全員避難完了」、「警戒警報解除後、家庭訪問ヲナス」と書かれ、緊迫した状況が伝わってくる。

「久留米市襲撃を受け相当の被害ある由」とあるのは、久留米空襲があつた8月11日の記録。さらに「敵機本校の上空を通り退去せり」と続く。大善寺小の上空が、空襲を行つた結果、帰還ルートになれる可能性が高い。

70年前の学校日誌を熟読した圭一氏は、「終戦前後の学校浮かび上がつてこ書棚に残された絆らないが、平和を方の思いを感じて」と話した。日誌は12月12日、門図書館（久留米市）で開かれる「くらし展」で公開され、復刻版も発行する。

校区コミュニティセンター

110942 (左)

16.



復刻版刊行 12日から原本展示

校長「戦争の姿 目に浮かぶ」

日誌は昨年秋、市川昌庸校長が校長室を整理していく、書棚の奥から見つけた。日誌のそばには、1978年に編集された「戦争体験記」も保管されていた。体験記は、当時の児童の父母や祖父母らが語ったものだった。

市川校長は早速、手にとって読み進んだ。当時の学校や校区の様子、戦争が児童や大人たちに及ぼした影響が語られ、「現実の戦争の姿が目に浮かんだ」。戦後70年を前にした時期にこの2冊が現れたことが、戦争体験の世代から今の世代への伝言のように感じられた。平和學習の資料として生かそうと思い立ち、地域学校協議会の協力を得て復刻版を刊行した。体験記は40編を収められた市川昌庸校長(右端)と地域学

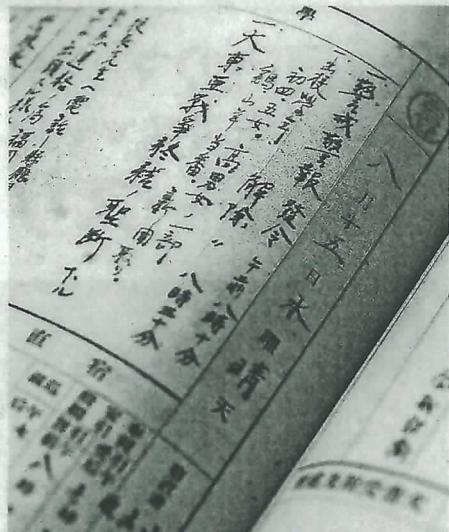
校協議会のメンバー久留米市「大善寺小 平和への願い」をまとめた市川昌庸校長(右端)と地域学
校協議会のメンバー久留米市

「大善寺小 平和への願い」をまとめた市川昌庸校長(右端)と地域学
校協議会のメンバー久留米市

日誌は昨年秋、市川昌庸校長が校長室を整理していく、書棚の奥から見つけた。日誌のそばには、1978年に編集された「戦争体験記」も保管されていた。体験記は、当時の児童の父母や祖父母らが語ったものだった。

市川校長は早速、手にとって読み進んだ。当時の学校や校区の様子、戦争が児童や大人たちに及ぼした影響が語られ、「現実の戦争の姿が目に浮かんだ」。戦後70年を前にした時期にこの2冊が現れたことが、戦争体験の世代から今の世代への伝言のように感じられた。平和學習の資料として生かそうと思い立ち、地域学校協議会の協力を得て復刻版を刊行した。体験記は40編を収められた市川昌庸校長(右端)と地域学
校協議会のメンバー久留米市

戦後70年



1945年伝える学校年鑑

日誌は1日1ページ、1月1日から12月31日まであった。1項目に1、2行ずつ、簡潔に記されている。前半は戦争末期の状況が読み取れる。日誌によるところ、地元から戦地へ向かう兵士を、児童や職員が大善寺駅で見送った。一方、戦死者が白木の箱で戻ると、全校で出迎えた。4月になると、陸軍の部隊が学校の一部を兵舎として借り上げるようになった。

日誌は1日1ページ、1月1日から12月31日まであった。1項目に1、2行ずつ、簡潔に記されている。前半は戦争末期の状況が読み取れる。日誌によるところ、地元から戦地へ向かう兵士を、児童や職員が大善寺駅で見送った。一方、戦死者が白木の箱で戻ると、全校で出迎えた。4月になると、陸軍の部隊が学校の一部を兵舎として借り上げるようになった。

子どもたちも労働力不足を補う担い手となり、勤労奉仕作業に駆り出された。田植えの時期には「特別措置」として農家児童、非農家児童などに分け、奉仕作業を割り当てていた。

空襲警報や警戒警報の発令・解除も時刻とともに記録されている。5月1日には「警戒警報解除後、家庭訪問ヲナス」と記され、緊迫した状況が伝わる。陸軍大刀洗飛行場が空襲下ル」と記された8月15日、校長は県庁から呼び出しの電話があり、急ぎよ

られた。連合国軍総司令部(GHQ)のもとで進められた民主化施策が地域にも波及し、社会が激変する

様子を物語っている。

久留米・大善寺小

大善寺国民学校の1945年8月15日の日誌。「大東亜戦争終結ノ聖断下ル」と書かれている

日誌は昨年秋、市川昌庸校長が校長室を整理していく、書棚の奥から見つけた。日誌のそばには、1978年に編集された「戦争体験記」も保管されていた。体験記は、当時の児童の父母や祖父母らが語ったものだった。

市川校長は早速、手にとって読み進んだ。当時の学校や校区の様子、戦争が児童や大人たちに及ぼした影響が語られ、「現実の戦争の姿が目に浮かんだ」。戦後70年を前にした時期にこの2冊が現れたことが、戦争体験の世代から今の世代への伝言のように感じられた。平和學習の資料として生かそうと思い立ち、地域学校協議会の協力を得て復刻版を刊行した。体験記は40編を収められた市川昌庸校長(右端)と地域学
校協議会のメンバー久留米市

8月15日 「戦争終結ノ聖断」

された3月27日は「爆弾投下のとき」に聞かれた。「大東亜戦争終結ノ聖断下ル」と書かれていた。福岡大空襲の6月19日は「福岡地方大火災発生セル模様」。久留米空襲の

8月11日は「久留米市襲撃を受け相当の被害」と書かれ、さらに米軍機が同日は「福岡地方大火災発生」の上空を通って去つていつたことが記録されている。

「大東亜戦争終結ノ聖断下ル」と記された8月15日、校長は県庁から呼び出しの電話があり、急ぎよ

られた。連合国軍総司令部(GHQ)のもとで進められた民主化施策が地域にも波及し、社会が激変する

様子を物語っている。